

インド・釈尊あれこれ紀行



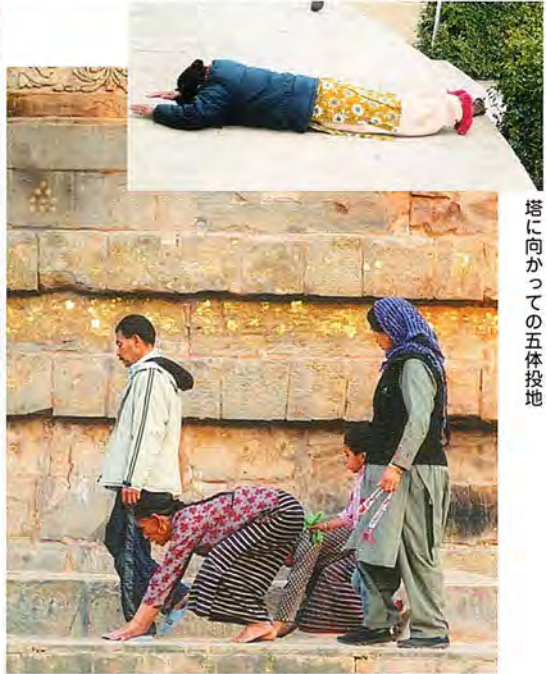
約50年に著者が撮ったダメーク塔

釈尊最初の 教化説法の地 サールナート

ブツダガヤ、にれんぜんが尼蓮禪河の河岸で7日7夜、
竜王ムチャリンダに守られて寒さをしのいだ
釈尊は、ヒンドウ教の聖地ヴァナラシの郊
外サールナートを目指した。サールナートも
釈尊が悟りを開いたブツダガヤも、ともにヒ
ンドウ教の聖地でもあり、人々が多く集ま
る所であつた。サールナートで教えを説いた
5人は、以前に修行にも励んだ5人の修
行者である。この5人、釈尊の父が我が子に
つけた護衛ともいわれている。



サルナートのシンボル、ダメーク塔



塔に向かっ
ての五体
投地

ダメーク塔の周りを五体投地するチベットの人々

サルナートはもともとサルランガナート鹿神の聖地であった。ここが鹿の園（鹿野苑）と呼ばれているのも、その故からである。

さて、釈尊がこの地で説いたのは四諦、すなわち四つの真理と八正道、すなわち八つの理想的生活方法であった。

四諦の第一は苦諦、つまり日々の生活の苦しみのこと。これには物理的な痛さと、何をしてもうまくいかない精神的な焦りも含まれる。

第二は集諦、これら多くの原因で大きくなった苦しみのこと。

第三は滅諦、苦しみを乗り越えるところに悟り、つまり平和な生活ができること。

第四は道諦、苦しみを乗り越える方法で、次の八正道が具体的にその方法を示す。

初めに正見、物事を正しく見る、正しい立場を守ることに、次に正思、正しい思想を持つこと、それから正語、正しい言葉を使うよう心掛けること、続いて正業、つまり正しい行



発掘直後のライオン頭柱

為をすること、そして正命、毎日正しい生活を送ること、次に正精進、日々努力すること、そして正念、物事を判断すること、最後に正定、精神統一をすること。そう、八正道とはすべて人間の心に関わり、同時にそれにとりまなう実際の行動のことを指す。

サールナートの広大な遺跡のほぼ中央にあるのがダメーク塔。ダルメーク・イークシャス。ストウーパ、すなわち法の眼の塔である。直線的幾何学模様が見事な塔だ。その周りを五体投地、一回ずつ体を地面につけ身長の長さだけ進む礼拝をするチベット巡礼者が途切れることがない。ちなみにこのダメーク塔は5世紀、グプタ王朝期に建てられたものである。

この遺跡の中で発見されたのが、アショーカ王柱の断片で、インド共和国のシンボルマークであるライオンの頭柱が飾られていた。アショーカ石柱の下部には、僧団の分裂を禁ずるアショーカ王の勅令がはつきり読み取れる。ダメーク塔の反対側にはさらに壮大な塔の基壇だけが残っている。この基壇の下から釈尊の遺骨を取めた舍利容器が発見された。残念ながらこの塔はかつてベナレスの大地主であったジャガット・シンが自宅を建てる時の材料として利用してしまい、現存していない。

ダメーク塔の反対側に残る大塔の基壇跡。
ここから仏舎利が見つかった



ダメーク塔と筆者。
塔には金箔が貼られる



また、この塔の周辺で見つかった説法印を結ぶ赤砂岩の仏像は、今は塔に隣接する博物館に飾られている。ちなみに日本の国立博物館でも展示されたことがある。

この地で釈尊は在家者ヤシャ一族を弟子としたが、これが在家者教団の初めと思われる。境内には野生司香雪画伯（釈迦の生涯を書き続けた仏画家）の描いた仏伝図が内壁に描かれているムーラガンダクテイ寺院が建っている。また、ジャイナ教の寺院もダメーク塔の外側に建立されている。

佐藤良純

大正大学名誉教授

さとうりょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学、同大学院、インドテリー大学院に学ぶ。昭和34年より大正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退職、大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有余回。著書に「ブツダカヤ大菩提寺」、「釈尊の生涯」など多数。